

主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討<sup>1</sup>

聖徳大学 伊藤裕子・相良順子・山梨県立女子短期大学 池田政子・横浜市立大学 川浦康至

## Reliability and validity of Subjective Well-Being Scale

Yuko Ito, Junko Sagara (Faculty of Humanities, Seitoku University, Iwase, Matsudo 271-8555), Masako Ikeda (Yamanashi Women's Junior College, Iida, Kofu 400-0035), and Yasuyuki Kawaura (Faculty of Humanities and International Studies, Yokohama City University, Seto, Kanazawa-ku, Yokohama 236-0027)

In this study, a subjective well-being scale was developed, and its reliability and validity evaluated. The Subjective Well-Being Scale (SWBS) had twelve items which covered four domains. It was administered to 1005 adults and 520 college students. Results indicated that for the students, college life satisfaction and self-esteem had positive correlations with SWBS score. For the adults, marital satisfaction, workplace satisfaction, and household income satisfaction had positive correlations with the score. These findings showed considerable constructive validity for SWBS. In addition, internal consistency was sufficiently high, indicating the measure's high reliability. SWBS may be a simple but reliable and valid measure, and it is useful for examining subjective well-being of both adults and college students.

**Key words:** subjective well-being, reliability, validity, adults, college students.

“健康”とは“単に疾病や障害のない状態ではなく、身体的、精神的、社会的に完全に調和のとれた良い状態 (well-being)”であると世界保健機関 (WHO) 憲章の前文でいわれてきたが、実際には健康をとらえる上で、従来の心理学は人間のネガティブな側面、病的側面に焦点を当てがちで、ポジティブな側面が軽視されてきたといえる。他方、QOL (Quality of Life) 研究の流れの中では、社会指標のような客観的指標だけでなく、個人の主観的判断、心理的側面を重視する必要性が叫ばれ、SWB (Subjective Well-Being) が問題とされるようになった (石井, 1997)。こうした中、近年では人間心理の肯定的な側面に焦点を当て、生涯発達の視点から、より充実した生活を目指すことの重要性と、そこに至る心理社会的要因の解明が、高齢者のみならずすべての世代で必要となってきた。

Subjective Well-Being は主観的幸福感あるいは主観的健康感と訳されるが、感情状態を含み、家族・仕事など特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範な概念であり (Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999), ある程度の時間的安定性と状況に対す

る一貫性を持つと考えられる。主観的幸福感研究は、QOL 研究の発展の中で生まれてきたもので、QOL の主観的あるいは心理的側面といえる (石井, 1997)。なお、SWB と近似した概念として Psychological Well-Being があるが、多くの研究の中ではほぼ同義として扱われている。

主観的幸福感には単一の尺度があるわけではなく、研究者によってその指標はさまざまである。しかし、主観的幸福感の構造として、認知的側面と感情的側面の二つの領域があることは多くの研究者の一致した見解になっている (Diener et al., 1999; Larson, 1978)。認知的側面は自己の生活に対する満足度を指し、感情的側面は楽しい・悲しいといったポジティブ感情とネガティブ感情の両面をいう。たとえば、Lang & Heckhausen (2001) では、主観的幸福感として、生活満足度と快感情・不快感情尺度を使うなどがある。

欧米では、Wilson (1967) がレビュー論文を発表したように、かなり早期から主観的幸福感が研究されてきたが、日本では 1980 年前後から老年学の分野で研究が盛んになってきた。しかし、ここ数年、老年学の分野だけでなく、青年期以降のすべての発達段階で、主観的幸福感研究が生涯発達心理学の観点から着手され始めた。これに伴い、高齢者の心理的幸福感を測定する尺度だけでなく、さまざまな尺度が主観的幸福感として開発されつつある。たとえば寺崎・綱島・

<sup>1</sup> 本研究の一部は、平成 13 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 C13837026) の助成により行われた。また、研究の一部は、日本社会心理学会第 40 回大会 (1999)、日本発達心理学会第 13 回大会 (2002) において発表された。